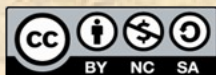


# 日語文學選讀

Reading of the Literature in Japanese

## 第六講：佐藤春夫〈女誠扇綺譚〉 —偵探小說與殖民地（二）

授課教師：國立臺灣大學 臺灣文學研究所 山口 守 教授



【本著作除另有註明外，採取創用 CC 「姓名標示  
—非商業性—相同方式分享」臺灣 3.0 版授權釋  
出】

# 上課使用講義

- 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉（1925）

# 濁音 / 鼻濁音

- 見事

濁音 Mi-Go-To

鼻濁音 Mi-Ngo-To “N” から始めると発音しやすい。

# 中国と台湾の地名

- 音読み 例：台北（たいпей）

- 「高雄」の場合

先住民 Takau → 漢人寫成「打狗」

→ 日本人「高雄」（たかお）

# 中国と台湾の地名

- 上海と青島の共通点：
  - 一、租界。
  - 二、港。
  - 三、近代以降不平等条約の発生する地点。

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉

- 植民地の白昼夢が生む異国情緒。
- 植民地想像による神秘性→不明の世界への興味。
- 神秘 / 不明の解明→謎解き探偵小説の原型。
- 世界への違和感→無意識の植民地支配への抵抗感。
- 自分への不安と感傷→近代人の焦燥。

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 一、赤崁城址（シヤムカムシヤシ）

友人の世外民の案内で安平の廢市を見物に来る。人気がない風景は私に悪夢に似た寂しさを感じさせる内面性を備えていた。深さを帯びたその寂しさの中、聞こえてきた胡弓の音に世外民は「月の下吹笛よりも更に悲しい」と詩人らしい感想を漏らす。



# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 二、禿頭港

私と世外民は帰り道、禿頭港を訪れ、かつての豪邸が廃屋となっている所を見つけ、異国情緒に惹かれた私は世外民を誘って入ってみた。以前は台湾南部一の富豪沈氏の邸宅だった廃屋に足を踏み入れた二人は、二階から「どうしたの？なぜもっと早くいらっしやらない？」と女の泉州語が聞こえてきたのを耳にして、住民がいるものと思って外へ出る。近所の老婆から、それが幽霊の声だと聞かされる。



# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 三、戦慄

老婆の語るこの家の歴史。沈氏はかつて対絵湾南部一の富豪で、大船 50 艘を所有していた。この豪邸ももとは一人娘の婿強取り用に建てたものだった。ところがある時、強風で船がすべて沈没して、一夜のうちに豪商は没落してしまった。50 歳前後だった主人は失意のまま病死。一人娘は発狂。母親もまもなく病死した。4 代前の沈氏は泉州からやってきて、台湾中部であくどいやり方でお金持ちになり、特に冷酷な弟は他人の土地を占有するために寡婦ひき殺したほどであった。遺言で台南へ移った沈氏の急な没落は老婆の祟りではないかとも噂された。

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 三、戦慄

発狂した一人娘は廃屋に残って婿の来るのを焦がれ、やがて腐乱死体となって発見されたが、発見者も二階上がる前に「どうしたの？なぜもっと早くいらっしやらない？」という声をみみにして

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 四、怪傑沈氏

私は世外民と酒杯を交わしながら議論する。私は幽霊話のからくりを、逢引の場所に使う男女の話に求めようとして、廃屋もつ犯しがたい権威性と若い女の玲瓏たる声に惑わされたのだと考える。一方世外民は女の幽霊の存在を信じて、怪異譚として理解する。私は中国的伝統を継承しようとする世外民の詩人の目では物事がはっきりみえず、亡国趣味だと揶揄する。世外民は亡国と荒廃は異なり、荒廃の中にはまだ生きてきた精神が残っていると主張する。



# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

## • 四、怪傑沈氏

私は荒廃して消え行く中から別の新たな者が生まれると反論する。沈家の勃興と没落の話は台湾ではありふれた伝説だと話す世外民に、私は植民者は台湾において開拓のために悪徳も利用する歴史があることを指摘して、やがてその悪徳な植民者よりも更に大きな植民者（日本帝国主義を暗示）が現れる歴史の循環を説明する。ここで私は世外民との出会いや友情について紹介する。

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉

## 各章のあらすじ

- 五、女誠扇

五日後、私は嫌がる世外民を誘って再び廃屋を訪れる。幽霊話を信じない私は世外民に先じて恐る恐る二階へ上がってみる。人の歩いた後はあるが、誰もあらず、空っぽの黒檀の寝台の下に私は女誠扇を発見して、こっそり持ち帰る。世外民は寝台で赤い蛾を見かけて外へ出たことえお告白する。私が拾った扇を見せると、世外民はそれが女誠扇であることを説明する。私は発狂した沈氏の娘と逢引の女の対比を想像して善悪の彼岸を思う。

# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 六、エピロード

生きる意味を見失いかけている私のところへ、世外民が禿頭港の縊死事件のニュースを知らせてくれる。縊死事件がどのように発覚したが疑問を持った私のために、世外民は穀物問屋黄家の娘が夢のお告げで縊死事件を知った噂を仕入れてくる。



# 佐藤春夫 〈女誠扇綺譚〉 各章のあらすじ

- 六、エピソード

その話を疑った私は世外民の案内で黄家へ取材に行く。そこで私が扇を見せて娘を問い詰めると、帳の陰から扇を求めてすすり泣く若い女の声がして、私は扇を置いて世外民と共に立ち去る。数日後、私は新聞社で黄氏の若い下女が日本人との結婚を嫌って自死したとのニュースを知る。



# 発音練習（六、エピソードから）

p.272

- 「当座」

→ その時、その場面

- 「跳梁」

→ 1. 飛び降り。

2. 跳ね回る。



# 発音練習（六、エピソードから）

p.273

- 「柄にもなく」  
→ 自分の立場に合わない。  
「柄」：人の性格、性質。
- 「時折」、「折から」  
→ ちょうどその時。

# 発音練習（六、エピソードから）

p.273

- \*お含みおき下さい：

彼の言葉は何が含んでるような気がする。

言葉を出せずに、悩みとか不満とか口に包んでる。

- 「説く」

→ 説得する。

# 発音練習（六、エピソードから）

p.273

- 「認めない」

→ そんな考えられない。

非を認めない：自分が間違っただけを承認しない。

認印：確認の印。

# 版權聲明

頁碼	作品	版權標示	作者 / 來源
1-20			轉載自 Microsoft Office 2010 PowerPoint 設計主題範本， 依據 Microsoft 服務合約及著作權法第 46、52、65 條合理使用。
7-15	一、赤坂城址(シヤムカムシヤシ)……数日後、私は新聞社で黄氏の若い下女が日本人との結婚を嫌って自死したとのニュースを知る。		整理自〈女誠扇綺譚〉(東京市:文體社,昭和 23[1948])。 依據著作權法第 63 條第 2 項、第 46 條合理使用。

